

第6回（平成24年度第4回）札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

24.9.7 札幌文化芸術円卓会議事務局

【伏島委員長】

9月になって、アウトプットを探っていかなければならない時期に来た。来年の3月あるいは2月には、皆さんの意見を集約し、「円卓会議からのメッセージ」という形で市長に差し上げることにしたい。

実質的な作業は、今日とあと一回ということになる。そこで、議論を加速するというわけではないが、そろそろまとめ始める時期に来ている。

今日欠席の委員からのペーパーについて、事務局から紹介して欲しい。

【事務局】

まず、浅野委員から御提出のあった「金沢21世紀美術館に行ってきました！」という資料から説明したい。

浅野委員は、金沢で「金沢21世紀美術館」をご覧になった。そこで、アートセンターの理想的なモデルは、金沢にあるのではないかとお考えになった。なぜ、そのように思ったかという、まず、金沢21世紀美術館には明確なコンセプトに基づき運営されている。それが、4つのコンセプトで、1つ目は、「世界のいまとともに生きる美術館」。これは、時間や空間を越えて従来のジャンルを横断する。そして、芸術活動にじかに触れて、体感することができるということ。2つ目は、「まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館」。これは、教育、創造、エンターテインメント、コミュニケーションの場など、新たな「まちの広場」としての役割が期待されているということ。3つ目は「地域の伝統を未来につなげ、世界に開く美術館」。これは、工芸をはじめとする地域の固有文化が、多様化する21世紀にどのような可能性をもつのか。インターカルチュラルな視点に立って問いかえる実験の場となるということ。それと、4つめは、「こどもたちとともに成長する美術館」ということだ。

そして、金沢21世紀美術館は建物としても非常に特徴のある美術館ということ。まちに開かれた公園のような美術館で、円形になっていて、どこからでも入れるデザインになっている。このように、建築の面でも、運営の面でも明確なコンセプトがあることが非常に大切だと感じたということ。そして、大切なのは人の交流の場であるということ。

中には、移動カフェがあったり、カフェレストラン「Fusion21」は、「美術館で第2の感動」だそうで、地元の食材を利用した料理は大変な人気があるとのこと。

特にすごいなと思われたところは、交流ゾーンが無料で、近所の幼稚園児が、先生に引率されてインスタレーションを大騒ぎしながら見に来ていたことで、世界的なレベルの展示と一般愛好家の作品がともに展示されている美術館だから、多くの来館者があると思ったとのこと。

アートセンターを考える上で、金沢の成功事例は大いに参考になる。そして、金沢は観光都市だが、札幌も観光都市として、国際ビエンナーレなどを今後推進していく上でも、芸術と観光の関わりについて十分検討を進めていく必要がある。中心部にアートセンターが出来て、市民の方以外に、道内、海外からの来場者が来れば、非常に大きな意味を持つということ。アートセンターの展示スペースを使った企画展として、地元の作家の展示スペースが確保できれば、地元の作家のこれからにもつながる意味でも重要ではないかと感じたということだ。

次に荒川委員のメッセージについて紹介したい。

まず、アートセンターと観光ということで、アートセンター自体が札幌市の顔をなるような施設であってほしい。アートセンターで公演・発表を行うことが誇りとなるような施設であってほしい。単なる箱ではなく、観光の面でも名所となるような施設となってほしい。

そして、催事以外での集客ということだが、施設内の床タイルなどに、小さなプレートを張ったり、自分の名前を刻むというようなプロジェクトをおこなっても面白いのではないか。そのようなものを見に来訪する方もいるのではないか。

それから、文化芸術に対する資金ということで、地元の方がアートセンターを使うときには、使用料の減額等の措置があってもよいのではないか。そのかわり入場料は安くする。そのような御提案もいただいている。

以上、お2人の御意見を紹介した。

【伏島委員長】

浅野委員は遠くまでお出でになって、金沢の御報告をいただいたのもうれしいと思う。また、荒川委員もお忙しいのにコメントをいただいてありがたい。

ただ、少し気になったのはアートセンターがすべてのようなイメージがあるのだが、私の捉えでは、アートセンターは、北1西1に建設が予定されている（仮称）市民交流複合施設とイコールではないという認識だが、そのあたりはどうなのだろうか。

【事務局】

委員長のおっしゃったように、北1西1に建設を予定している（仮称）市民交流複合施設の中には、ニトリ文化ホール級のホールと、アートセンター、図書館の機能を持つスペースを予定している。まさに複合的な施設だ。その建物イコールアートセンターということではなくて、その建物の中に複数の機能が含まれているというようにお考えいただいても良いと思う。

【伏島委員長】

それでは、議事に入っていきたい。

これまで、みんなでたくさん良いことをしゃべってきたと自画自賛している。それを、そろそろまとめなければならない。

若干心の余裕もあるので、委員長として、みなさんの代行をやってみた。

今まで、プランナーとして A4 1 枚でプレゼンするというをやってきたので、「札幌文化芸術円卓会議からのメッセージ」作成のための私的メモ（仕掛中）を作成してみたが、まさに仕掛中で、不十分な点、言い足りないところがあり、みなさんの意見を熟読玩味して消化しているかと言えば、それほどのもでもない。もちろん、これまでの意見要旨は 2 回、3 回、4 回と目は通したが、まだ消化しきってないところがあると思う。これは、言葉の正しい意味で言うたばかりだ。みなさんの、これまでの楽しいお話しを延長線上に、このペーパーを使ってもらいたいと思う。

これまでのみなさんのお話しを聞いていて感じたのは、積極的な意志だ。このような会議に参集したみなさんなので、積極的な意見を持つのはもちろんなのだが、その中で、文化といってもどうも分からない、情報が目に見えない、これは、みなさんだけではなく従来からあちこちで言われていることだ。そのような知りたいということがまず最初にあるのではないと思う。そして理解したい。それと、市民のひとりとして文化に関わっていきたい、楽しんでいきたいという思いを強く感じた。そこから、アートセンターとは何かという原点を整理してみた。前回傍聴の方から、「アートセンターとは何か」という質問があった。我々はつい当たり前になっていて、アートセンターとは必要なものだからと言ってしまいがちだが、その方の意見に、これはちゃんと考えておかなければならない、アートセンターは、関係者がプールの中で、勝手にものを言い合っているだけのことだと受け取られてしまうことは、本来希望するものではないので、アートセンターとは何かという問いにいつでも答えられるようにしておかなければならない。その辺をしっかりと踏まえる必要がある。

なぜアートセンターか、①市民とアーティストの「知りたい」、これは今日は御欠席の斎藤委員も言っていたことだが、芝居のことは分かるがファイン

アートのことは良く分からない、逆のことも言える、文芸の方もそうだ。文芸は余り議論にならないのだが、文芸のみなさんがどれだけ芝居を見ているか、札幌を聴いているか、多くの方は意外と、自分の世界でないところは見聞していない、お互いに知らないということがあつた。そんなことから、今札幌で行われている文化活動と文化行政、文化行政という言葉を使ってしまふのは、ちょっと微妙だ。文化行政と言ってしまふと、札幌市観光文化局文化部の所管しているものが文化行政だと思われてしまふのは、市民としては困る。ここで言う文化行政とは、市民の目からみて、文化に関わる行政すべてととらえていただきたい。そうすると、教育委員会が所管するいろいろな文化的な活動も、文化行政に入つて来る。そのような注釈を付けた上で、市民の私としては文化行政という言葉を使いたいと思う。そういったものを総合化してかつ見えるようにする。この円卓会議でも頻繁に使われてきた言葉が可視化だ。見えるようにしようよ、やさしい言葉で。それがまずあつて良いと思う。そうすると、多くの文化情報だとか、いろいろな活動を多く知ることができる。そして携わつている人たちに、いつでもではないかもしれないが、出会うことができる。そんな中で、札幌に暮らすコミュニティの輪が広がっていく。

それと、理解したいということでは、専門家とかボランティアの手を借りて、文化芸術の楽しみを深めるということがないと、先につながつていかないというところがある。この間、教育文化会館の現場で頑張つている人とお話しをしたのだが、「教育文化会館はとても良い仕事をしているが、市民のみんなが知つているとは限らないでしょう。」と話したところ、「その通りだ。」と。「すこし、あなたたちの城に閉じこもつていないで、アートセンターに出てきて少しやってみたらどうか。」というのと、「それはいいですね。」というやり取りがあつた。それは、ショーケースだ。文化芸術の送り手も、ショーケースがあれば、自分たちの活動を少しでも市民のみなさんに知つてほしいというニーズがあるのではないか。われわれ一般市民が文化芸術の楽しみを深めることができることは、携わつている人たちも、自分たちの活動を市民に知つてもらふことができるという相互作用がある。それを期待していきたい。

それと、第1期の円卓会議からしきりに、キーワードとして登場するのは、文化行政の検証だ。やはりきちんと見直して、厳しい行財政の中で、市民の目線で検証するということ。これは我々の深い希望の一つとしてあるのではないかと思う。可視化とも連動するのだが、オープンに議論して、ただ市に任せるのではなく我々も、責任を持ちながら参画していくような、本来あるべき市民自治というなかで、文化行政に検証とすることからかかわっていくという希望も我々の中に深くあると思う。

そして、やはり楽しみたい、かかわりたいということがあるので、そういうニーズをきちんと受け止めるような多彩な参画プログラムをアートセンターは持つべきであろうと思う。

それと、このペーパーには直接出は来ないのだが、ずっと議論されていることは、札幌の文化の水準を高めようということだ。では、それをどうするのか、このような表現にしてみた。創造・発信と受容のエンジンとなる場を都心につくり、いろいろな動きを高めて、結果として札幌の実力を高めて行こう、そういう場としてアートセンターをつくって行こう。これは、アートセンターと言うか、複合施設だ。一体となった装置・空間、そして人的パワーを活かして、実力を高めて行くということになろうかと思う。

それと、敷居が高くない、楽しい場所にしたいということが出てきたと思う。おそらくそれは、みんな札幌が好きだ、札幌をもっと良い街にするために、都心に札幌の魅力を結集した広場をつくれたらいいね、これは、さきほどの浅野さんの金沢 21 世紀美術館の見聞にも表れている。せっかくなのであれば、ただのがちがちの楽しめない箱ものとは反対の楽しい空間の広場を持ったものにして行こうということではないかと思う。

それでは具体的にどうするのか、まずソフト事業が肝心だと思う。市民交流複合施設ができるのはまだ先だ。だからといって、何もしなくても良いということにはならない。逆に、第1期、今期の円卓会議の中で、本当に良い意見がでていたので、私なりに整理してみた。

まず、冒頭の可視化ということと大きくかかわるのだが、お互いを知り合うためのメッセ、メッセは見本市ということになるのだが、文化を交流するメッセを、フェスティバル的に年に何回かにぎやかにやるのも良いのだが、小規模でも常設のメッセということが重要になると思う。これは、全国の政令指定都市でもあるようでやっていない。

去年名古屋で文化経済学会があった際に、「愛知芸術文化センター」を自分の足でつぶさに歩いてみた。これは、まさに複合的な文化センターで、この地下に情報センターがある。これは、結構良いのだが、ただ、一方的だ。広いスペースがあり、いろいろな人が資料を持ってきて置いてある。それを市民がだまって持って帰る。大通りの「観光文化情報ステーション」を巨大化したようなものだ。「演歌は扱っていないのか」と聞いてみたら、「そういうものは扱っていない」という。では、その仕切りはどこか、フォークロアが良いのかと聞いたら、ちょっとそれはと言って、極めてスタンスがはっきりしていない。先進的なものであるとは言えなかった。東京も、上野の「東京文化会館」に行けばそれがあるかと言えない。新宿にあるか、渋谷にあるか、意外とあるようでない。やはりきちんと考えた方が良い。

文化活動と文化政策の可視化、全体が見えることが肝心なのだが、そのときに、アーティスト、団体、文化施設、教育機関、関係企業が、あるていどいっしょになって情報提供するということがこれまでなかった。

それとインターンシップの議論がずいぶんできていた。それでは、インターンシップを希望する人はどこへ行けば良いのか。これまでは、たぶん個別に動くしかなかった。

また、寄付をしたいという人も実はいる。今日本の個人資産が 1,500 兆円、札幌には、お大尽がないかということそうではない。私の身近にもいた。年間二百万円を匿名である団体に寄付してきた男がいる。そのような無名の方が、札幌にはけっこうおいでになる。そして企業メセナもそうだ。経営は厳しいのだが、気持ちとしては、少しやりたいという方もいる。企業メセナにもいろいろある。お金を出すメセナもあれば、場所を貸すメセナもある。人をお借りするとか、いろいろな形のメセナがある。これも柔らかく考えて行けば、いろいろな方々が、うちはちょっと小さなものしかお手伝いできないけど良いか、というような、そういった中小零細企業のオーナーさんがかかわっていく可能性はゼロではないと思う。それと、アートユーザーだ。ここでいう、アートユーザーは例えばデザイナーのことを考えていただきたい。世の中で、アーティストはたくさんいるし、デザイナーもたくさんいるが、デザインで飯を食いながら、ファインアート（純粋芸術）で頑張っている方もいるし、名前を使い分けている方もいる。切り絵作家なのだが、商業的なニーズにこたえるときはひらがなで、個展を開くときは本名でという方もいる。さまざまな形で、何とかご飯を食べながらアートで頑張っている方もいる。そういった方を必要とする企業もある。

会社の営業のツールを作る時に、アートの力があるかないとでは全然違う。

そういうアートユーザーを含めて、ニーズを持った人たちへの合同説明会を兼ねたメッセ、それはおそらく文化部の仕事であると同時に、創造都市の事業、もちろん伊藤副委員長が関係している映像と大いに関わることだ。そういう日本が世界へ輸出できる産業の一つである映像アートも含めたニーズもあるので、出会いの場をつくる。それができれば小規模なりに常設化していくことも十分に考えられる。そういうことがある程度出来て行く過程で、ポータルサイトも自ずから整備されていくと思う。

次は人だ。アートインターンシップとアートソムリエ、コーディネーター、この3つを便宜的に少し分けて考えた。まず、初期的な、学生、おじいさん、おばあさん、若いかたを含めて、入口的に位置付けたいのがアートインターンシップ事業、ここに、高校等と書いたのにはある目論見がある。平岸高校をご存知だろうか、この間、ファッション甲子園で最高の賞をとった。併せ

て観客賞も受賞している。シネマフロンティアで映画が始まる前のお知らせをつくっているのも平岸高校だ。放送劇でトップクラスの高校もある。道内へ広く目を転じれば、帯広には演劇でトップランナーの高校もある。さっぽろ、北海道には優れた若者たちがいるので、彼らの出番、もっと経験してみたいというニーズを受け止めるインターンシップ事業、札幌市芸術文化財団本体と、所管する施設だけでもいろいろなことが展開できると思うし、民間の劇場、美術館などが、相互に協力する中で受け止めることができると思う。インターンシップである程度磨いた後で、例えばアートソムリエにチャレンジするとか、専門的なボランティアになりたいというようなニーズが出てくると思う。

このアートソムリエ事業は、次に触れる観光事業ともからめていきたいと思う。アートソムリエは、アートセンターのフロントへ出て、いろいろな相談にも応じることができるような、ある程度のレベルのアートを存じ上げた人々、それを育成し、かつ認定することが大事だと思う。

私は、北海道のアウトドアガイド資格制度をつくってみた。それと札幌商工会議所のシティガイドもお手伝いした。この二つの制度を作ってみてよく分かったのだが、資格を取りたいと思う方が普通にいる。まじめに人生を楽しみたいと思う方がたくさんいる。なので、育成するだけではなく認定するというのをやっていくと、札幌の文化力を高める一つの柔らかい良い回路になるのではないかと思う。そのときに、斎藤歩さんが良く言うように、まだクラーク先生が必要だ、この平成の世でも。我々はどうしても井の中の蛙になりがちなので、道外、国内外、地元にもいる優秀な人材に来てもらい、そういう人たちに出番をきちんと差し上げて、後輩たちを指導してもらおう。そのような滞在型の指導の機会も設けたい。もちろん、そのような方々には独自に制作もしていただく。今もアーティスト・イン・レジデンスをやっているのだが、私から見ると少し狭い世界の中でやっている感じがする。そのようなことを行っていることを知らない札幌市民の方が圧倒的に多いと思う。それをもっと可視化してオープンにして、にぎやかに楽しく価値のあるものに高めていく。そういったことは、地元にいる優秀な人たちにも再び光を当てるといふことにもなるのではないかと思う。だから、外部からと書いたが、これを内外からと訂正する。

それと、札幌の滞在、去年の3. 11以降、北海道に滞在する方が増えたのだが、それとはまた少し違う意味で、週単位、月単位で、避暑を楽しむ人が増えている。現実には、シティ・ジャズの会場となったホワイトロックで、神戸から来られた70前後の御婦人の方にかがったのだが、月単位でお過ごしになって、札幌はすごいですねと褒めてくれた。このような人たちを増

やしていても良い。十分に札幌の観光文化産業の一つになり得るという確信をもった。なので、滞在型の観光客の方々が、札幌の文化を堪能できるしくみをつくる。これも実はあるようでない。コンソーシアム言わば協会だ。これは、札幌市が旗を振るというよりは、民間の、既にあるシアター、ミュージアム、ホテル、レストラン、旅行代理店、こういった人たちが、観光客にもっとしっかりと滞在型の文化を楽しんでいただくことによって、観光の消費にもつなげていく。これは、パリでもロンドンでもニューヨークでも当たり前に行われていることだ。ニューヨークには、人口10万人当たり、3.5の劇場があるそうだ。ちなみに、ロンドンは1.8、東京は0.9だ。良い意味で、東京やロンドンのまねをして、今は全然敵わないが、1人でも多く滞在消費をしていただけるような形をつくる。それは新たな観光文化産業を作っていくことにもなるし、雇用にもつながっていく。

海外からの観光客だけでなく、PMFでもけっこう東京から批評家が来ている。やはりきちんと、世界から評価されるような、論評されるような札幌の文化にならなければならないので、これは観光だけではなく、外からの批評の目を積極的につくるという意味でも、滞在型のアートシティを目指す必要があると思う。

それとアーツカウンシル、これは難しいのでもう少し注釈を付けなければならぬと思っている。これまでの議論の中でも助成の在り方をきちんとオープンにしていこうという声がすごく大きかった。シビアでやさしくない課題だが、取り組むべき必要があろうかと思う。市の事務方にもお願いしたい。今、東京、大阪、日本政府でもアーツカウンシルについては、かなり積極的にかかわっているのだから、それらの情報を整理して欲しい。

それと、これはみなさんから強い希望が出てきたことだが、私の言葉でいうと、市民と観光客が憩うアートな広場をつくっていこうということだ。そのときに、札幌のデザイン力を活かしたオープンな作り方があって良いと思う。すぐどこかに外注するということではないと思う。いろいろな方のオープンな議論があって、札幌のアーティストや建築家やデザイナーがいろいろ関わって行って、親しみやすくシンボリックな広場をつくる。つくること自体を一つのフェスティバルとして楽しんでいくような、そのような作業があって良いと思う。その過程で、もしまだ宣言していないのであれば、「デザイン文化都市宣言」のような、かつては、デザインシティということがさかんに言われて、1970年代から80年代には、全国持ち回りでやられたときがあった。今、ちょっとそれは下火になっているが、あえて立ち上げて良いと思う。経験デザイン、産業デザイン、それに生活デザイン、広く文化の議論をするためにも、デザインの議論をした方が良いと思う。

それと、よくデザイナーの方に聞くと、「札幌の景観色 70 色」のことを知らない方が多い。

すごく良い色で、良いネーミングだ。これは、札幌市立大学をもうおやめになった方が、市から委託されて、中心となって作った。これは、市のホームページにも掲載されているが、パソコンで見ると色が少し違うので、できれば、印刷されたものを見ると、とても良い仕事であることが分かると思う。とても良い仕事をしたのに眠っている。そういうこともあえて掘り返し、札幌のデザインの底力を活かせたらと思う。

それと多機能ミュージアムという言葉をつい作ったのだが、建築と広場を連結した多機能ミュージアム、これは、パリのポンピドー広場から、金沢から、世界中に良い事例がいろいろある。先ほど浅野委員からの御意見にあった金沢 21 世紀美術館を設計した妹島さんたちが世界に認められている、ヴェネツィアビエンナーレでも、伊藤豊雄さんが受賞している。仙台のメディアテークを作ったのも伊藤さんだ。日本の建築家はすごく評価されている。彼らの力も借りながら、建築と連結した多機能ミュージアム。これは文化活動のショーケースという言葉も使いたい。アマチュアのショーケースでもあれば、現にみなさんのやっているプロの、例えば、「さっぽろオペラ祭」をやるときに、そのビデオが「チカホ」でも、アートセンターの広場でもみられるような、何か楽しそう、いいねと思えるようなものに使えるショーケース、メッセも行っている、企画展もしている、それと札幌と大通り界隈と 500m 美術館と市民ギャラリー、もっと西にいけば教育文化会館もあるが、札幌には大通り、軸のようなものがあって、あえて、「ミュージアム回廊」と名付けて、その中心地にする。できればすすきのも入れたい。

金沢 21 美術館、東京の国立新美術館、国立新美術館は収蔵品は持たないで企画展のみ。団体の展覧会にも貸している。このため、団体展が、上野の美術館からここへ来ちゃっているわけだが、それと、前回懇切丁寧にご報告いただいた、アーツ千代田 3331、直島も、パブリックアートがああだこうだと言う必要がないくらい、すごいことを平気でやっている。

モエレもそうだ。あのガラスのピラミッドの中で、現代のバレエやダンスのパフォーマンスを普通に行っている。これは、結構先進的な試みとして評価している。そういうものも札幌にはある。この間お話ししたが、彫刻美術館が冬に野外でとてもよい仕事をした。芸術力が高かった。ただし、観ている方はほとんどいない。それで、彼らに「都心でやりたいね、札幌市役所の前はどうだろう。」と言ったら、「ぜひやりたい。」という話が出たくらい。そういった意味では、ウィンターアートを展開し、雪まつりを見直す一つのきっかけにもしたい。雪まつりは、札幌市民にとって、子どもが小さいから行

くものになっている。そうじゃないだろう、雪まつりをもう一度見直すみたいな、ウィンターアートの展開ができるのではないかと思う。

札幌の力は、アジアにも知られてきた。食の力だ。シンガポール、マレーシアにとどまらず、いよいよタイ、バンコクからもお客様が大勢いらっしゃる時代が、すぐそこに来ている。豊かなさっぽろの食、まもなく、大通でオータムフェストが始まるが、これまで札幌はいろいろな食のイベントを経験してきている。市役所の一階でも「元気カフェ」という形で、地味だが良い仕事をしている。このような経験を活かしたカフェ・サロン、これは純民間だとなかなかやりにくいところがあると思う。公共の再開発でもあるので、少しオフィシャルな形でのカフェを、ここでは展開できるかなと思う。そうするとみんなが集まる。

そんなことを、みなさんのお声を聞いてとりあえず整理した。それに加えて、パフォーミングアーツ系のアカデミーシアターを考えてみた。これは市民交流複合施設の本体に関わることになるのだが、アートセンターを議論する中で、レベルを高めようという議論がものすごく出ていた。音楽や美術だと、大学や教育期間が整っている。民間を含めてけっこうあるが、パフォーミングアーツとなると、アカデミー的なところは意外とまだ少ない。これは、明治維新のときに、上野に音楽と美術の殿堂はできたが、パフォーミングアーツは、とうとう芸大の中に構えなかった。伝統芸能も全部切り捨ててしまった。そのような、明治維新からの深い関わり方もあるが、日本は、パフォーミングアーツの分野が弱い。シェークスピア劇場のようなシステムもない。日本的にやっていくしかないのだが、それを考えると、大学や専門機関、シアターZOOなど、いろいろな団体と提携して、もちろん井出さんのオペラスタジオも関係するわけだが、人材育成と実験的な活動の場となるパフォーミングアーツ系のシアター、そのシアターもただのシアターではなく、アカデミーシアターだと思う。365日のスクールは非常に難しい。ただし、まずは、非常勤というか、何年制か分からないが、アカデミーとしての展開ができるのではないかと私は思う。

パフォーミングアーツ系のアカデミーシアターを作る際に関係する団体の長屋的なオフィス機能も、このアートセンターの中か近くにあると良いと思う。

Lプラザがすごく使われているのは、集まりやすいだけではなく、環境系の小さなNPOたちが、自分たちの居場所を持っているからだ。

あけぼのアート&コミュニティセンターは確かにあるし、頑張っているのだが、もっと都心でやりたいというものもあると思う。それを安い家賃で提供できれば、横浜で行っている事業とは違う形で、市民のみなさんの元気が

できる可能性があると思う。

以上、少し長くなったが、仕掛中のメモを説明させていただいた。このメモは、あくまで踏み台なので、これからみんなで楽しい議論を行ってまとめるのだが、それは、既存の構想・計画を否定するものではない。その逆で、今ある計画を、横からサポートするメッセージにしたいと考えている。

【漆委員】

2 回ほど欠席してしまったので、確認から。今回の円卓会議の目的は、市長にある種の提案をすることは、変わっていない。アートセンターができていくのであれば、そこに有効な提案をしていこうということに、話がまとまっていったということによいのか。

伏島委員長がまとめてくださったものが、今までの意見を集約したものだとして認識しているが、最近、美術館とか博物館とかもともとある文化施設ではなく、例えば水戸の芸術館など、既存の美術館とは違った機能をもった文化施設が出てきて、それが注目されてきて面白いなと思っていた。

横浜の「BankART1929」もそうだろう。もちろん横浜には美術館はあるのだが、文化力を高めていくという意味で、「BankART1929」が機能しているのだろうと思う。現代美術に代表されるように、いかに実験的なものを受け入れられるのかというところがある気がする。完成されたものを提供するのではなく、価値が定まっていないものとか、やってみなければわからないもの、創作そのものを受け入れる場というところで、決定的な差別化ができていないかという気がしている。雰囲気的なものは、伏島さんのものでかまわないと思うのだが、どこでもこのようなことを言っているような気が正直する。その中で、アートセンターでなければならぬ理由をきちんと確立するには、既存の美術館や博物館、郷土資料館や学校や公民館、シアターで出来ない何かチャレンジみたいなものが、このアートセンターで出来なかったら、結局アートセンターが出来ても変わらないかなという気がすごくしている。

そのあたりを、もう少し拡張できるといいなと思う。カフェやサロンももちろんよいのだが。

【伏島委員長】

そう、もっと本質的なところで、そこがちょっと弱い、きらっとするところがないので。

【漆委員】

きっと、市民権を得て行くためというか、制度として提言していくために

は、このような形にもっていくことも必要だと思うのだが、そもそもなぜアートセンターか、アートセンターである理由は、いま、言われているアートという言葉で定まったものに対して使っているのか、定まらないもの、何か可能性を感じるものとか、そういうものに関してアートという言葉を使っているのであれば、僕はそういうものの方がおもしろいなという気がしている。そういうものが出てくる中で必要なものが増えてくるような気がしている。

ソフトの肉付けや事業の上書きは、もちろん最初から構想しておくことも必要だが、あと後あと試されたものからどんどん広がっていく、常に変化していることがなかったら、アートセンターである理由もない。札幌市の中に観光の情報センターみたいなものが出来てしまったとしたら、それは、ほかに代わるものがいくつもあるのではないかと思う。役割分担ができれば良いと思う。アートセンターができることによって、他の施設の役割が明確になるくらいのチャレンジというか、そういうものができれば良いなと思っている。

【伏島委員長】

おそらく、どういう実験的な活動をここでやるかで、相当決まって来ると思う。例えば、武満徹とか、音楽家と美術家が東京で激しくやった。札幌でも NHK 放送劇団があって、青の会があって、青雲のように、戦後の世界はわんわんとしていた。運動としてどんどん高まっていった時期があった。それが、今は妙に豊かで、私からみたら、もっとわんわんして欲しいと思う。

美術家の方とパフォーマンスアートの人、あとは文芸家の人たちが、ひとつのものをつくってしまうみたいな、札幌方式みたいななどでもなく野心的な、デザイナーから、照明から音響から、みんな集まって年に一回すごいものを作ってしまう、そういうようなことができたらいいなと思う。

アートセンターの差別化もあるだろうし、アートセンターという受け皿で戦略的にはじめる、すごく差別的な文化活動、この両方ができたら多分格好良いと思う。

【伊藤副委員長】

今、伏島委員長がまとめてくれたことに対して、70%くらいは賛成だ。札幌には資源があると考えて、今委員長がおっしゃったように、新しい価値ができて、こうしたいという、そりゃしがらみもないし、メルティングポットに突っ込んでやったら新しいものができるだろうというのは、スタートだと思ふ。

人的な資源や芸術的な資源があって、それを使うと新しいものができたり、

それをうまく市民に、市民が知らない場合もあるので、それを再プレゼンテーションして、再発見させて、力を高めるとか観光にするという話だ。それは非常にベーシックな考え方だと思うが、今、漆さんがもう一つ言っていることは、市やアートカウンシル、アートセンターでも良いのだが、そこが提供するものが、我々が持っている資源を再プレゼンテーションするものだけでよいのかという考え方だ。つまり、先進的なものであってまだ価値が定まらないもの場合は、今までであれば、若い人たちを中心にやってきたのだが、だんだんその内容も多角化しているし、それ自体ボーダレスになってきている。あるいは最初からある程度の資本や時間をかけないと、個人では消化できないこともある。

だから、市民にとって見ると、芸術はこういうものだとか啓蒙するだけではなく、これは何だという教育も必要だと思う。そうしないと結局先進的な事例を市につくるには時間がかかってしまうのではないかということだ。だから、遊びの部分も作れということだ。

場所の作り方も、「アーツ千代田」にしても BankART1929」にしても、我々が行って、ある程度感心するのは、みたことがないようなものであって、ある冒険をしている。それが必要だということだ。漆さんに賛成するところがある。

さきほど浅野さんが書いてくださった「金沢 21 世紀美術館」だが、当然我々観光客の視点から見ると、金沢は文化戦略ということと同時にやっていて、それで金沢 21 世紀美術館が先進事例であるという話なのだが、それは、21 世紀美術館自体が、建物も見せている内容自体もかなり、カッティングエッジなもの、つまり先端的なものにしている、ほとんど金沢と関係ないつくりで先進的なものにしているからだ。最近できた「十和田市現代美術館」も、ほとんど十和田と関係がない。ただツールとして現代美術館を地域おこしに使っているが、内容は別に地域と結びついていない。それは、今は多摩美術大学特任教授だが、金沢 21 世紀美術館の立ち上げる際にキュレーターとして長谷川祐子さんがいて、十和田の場合は南條史生さんがいて、要するに、一番最先端のキュレーターを呼んできて行った。だから、当然それは世界的なレベルにもなるし、観光スポットにもなるけれども、地域の芸術的な資源を使っているわけではない。ただ、そのときに、現代美術を単に顔見世として使うのではなくて、おそらく 10 年くらいやってみて、それをどのように地域のコミュニティで、内容を場所自体を継続していくかということについては、かなり戦略を立てたと思う。ポイントは、見たことのないものを作ったということ。あるいは、見たことのないものを紹介する施設を作ったということ、成功事例の鍵だと思う。

【漆委員】

これは、素朴な疑問なのだが、「アートソムリエ」はかなり浸透した名称なのだろうか。

【伏島委員長】

浸透はしていないだろう。

【漆委員】

これから使おうとしているのか。

【事務局】

アートソムリエは造語で、そう一般的な言葉でもないだろう。今、野菜ソムリエとかの言い方があるが、それと同じではないか。

【伊藤副委員長】

それでは、ボランティアベースの文化ガイドを言い換えたということか。

【事務局】

ソムリエというのだから、お客さんの好みを聞いて、それに適するようなものを提供していくことが出来る人という意味で使っている。

【伏島委員長】

上っ面な知識があるだけではないと思う。ある程度現場も経験していて、噛み砕いた形で第三者に伝えることができる方なのだろう。

【事務局】

例えば一般市民の方が来て、その人の好みに合いそうな行事・イベントを紹介してあげるような、そのようなイメージではないか。

【漆委員】

単純に言葉として、これがどの程度使われていて、このような言葉を使うことに対して市民がどのように反応するか気になったので、今、創造都市とか札幌市の事業の中で、通りの良い造語として使い始めたということなのか、もともとどこかにそのような使い方があるのか。

【傍聴者】

アートセンター検討委員会の委員をしていた。ボランティアの方の中には、美術とか音楽とか非常に詳しい方がいる。そういった方々を活かした形で、もっと市民が市民に紹介するシステムをつくっていくということを考えたものだ。例えば、図書館へ行って、音楽に関する書籍を探しているときに、音楽に関する書籍はこのようなものがありますよと市民が紹介すると、市民の立場なので、専門家から教わるということではないので、市民が紹介してくれるという親近感を持って、少し入りやすくなると思った。ただ、アートソムリエというのは、作った言葉なので、どこにも浸透してはいない。

【事務局】

市民の好みに応じて対応するとなると、かなり専門的な能力が必要で、ボランティアの能力で対応できるか、専門的な職員が必要かとも思ったのだが。

【傍聴者】

市民の中にも、アーティストよりも詳しい方がたくさんいる。そのような人たちは、伝えたくてしかたがない。そのような機会を作った方が良いと思う。

【伏島委員長】

せっかく生まれた言葉なので、分かりやすい形で脚注を付けた方がよい。市民が市民に紹介するのは、すごく楽しそうだ。

【事務局】

観たことのないもの、価値の定まってないものを紹介することは、最先端の価値があると思うのだが、例えば、去年開設した 500 メートル美術館ではそのような試みをした。ところが、一般市民の中には、見たことがないもの、価値が定まってないものには、これが芸術なの？という反応も一部にはある。

そういうものをアートセンターの中で紹介したときに、それを理解できる人と、そんなのアートなのという人と両方の反応がでるのではないかと思う。それがちょっと怖いなという気もする。

【漆委員】

ちょっと補足したいのだが、作品を見せる、展示をするときにおきてくることだが、例えば古典的な作品を 500m美術館で展示したときに、理解す

る人は年代によっては多いかもしれないけれど、それは他の美術館でやっているのだから、わざわざここでやる必要はないのではないかと、また別の議論が出てくるのではないかと思う。

僕が言っている見たことのないものというのは、もちろん作品として先進的なものとか、まだ評価の定まっていないものと言う意味もあるのだが、要は取組のことだ。例えば文化情報、活動、人に出会い、コミュニティの輪を広げることができることが、アートセンターの知りたいことと、伏島委員長のメモにある。それをこのように書くのはかまわないし、ここでやりたいというのかまわないが、それはどこでもやろうとしている。こういう取組をするために、どんな手法をとっていけばよいのか。結局他と同じことをやっていたら、ほかでもこういうコンセプトは作っていて、他でも同じやり方を行っていて、チラシをつくってとかやっているのだが、別のアプローチでやることはできないだろうか。それを例えばアートのワークショップでできないかとか、もっと違う素材を使ってできないか、違うメディアを使ってできないかとかというような取組が、もしかしたらアートセンターだったら出来るのではないかという期待がある。つまり、単純にアートを紹介する行為として、新しいものを見せるということだけではなくて、このアートセンターが札幌の中でなければならぬ必然性を高めていくために、アートセンターを紹介することもそうだし、そこに集まって来る情報を誰かに伝えることもそうだし、そこで取り組まれる催しもそうだし、いろいろなことが試されるのだと思う。それを一般の人に浸透させていくアプローチみたいなことに対して、より実験的であってほしいという思いがある。そのために、もしかしたら美術的な手法が必要かもしれないし、演劇的な手法が必要かもしれないし、何かコラボレーション的なものが必要かもしれない。例えば、イベントを宣伝するのに、普通だったら手紙を書いてとかDMを作って、チラシをつくってやるものが、大通公園で演劇で宣伝していますとか、今まで見たことのないようなことを宣伝から作品を見せるところまで含めて、非常に実験的にやってみる。もしかすると美術館の催しでは許されなかったり、学校ではできない、商店街ではそのようなことはやらないということが、アートセンターなら試みることができて、もしかするとそれがスタンダードになっていくかもしれない。例えば宣伝ひとつとってもそうなのだが、僕はそういうクリエイティブなものが、いろいろな形で試される場所にならないといけないのではないかと思う。作品を収蔵すること、見せること、ワークショップのことも言ったが、ワークショップだって、どこでも行っている。観光案内も観光文化ステーションはあるし、駅に行けば最低限のインフォメーションはある。今までにないアプローチが、機能させなければいけないものの中に取

り込まれている、工夫されているというのが良いのではないか。

さきほど、事務局から言ったことは美術を扱うものとしてよくわかるのだが、それとは少し違う意味で言ったつもりだ。

【伊藤副委員長】

何を見せるかというときに、先端といっても、最々最前衛から、まあまあ先端まである。例えば、この間のロンドンオリンピックの開会式を見たときに、はっきり分かったなと思うのは、要するにロックミュージシャンしか出なかった。ロックを聴いていた人も既に70代なので、かつて、ロックなんてと言っていた人は、もう死んじゃっていない。そこで、ポールマッカートニーが一番偉いということになる。そのように、世代は変わっていく。イギリスみたいに、演劇やロックミュージックや映画の演出やソフトだけを作って、アメリカのマーケットを使って世界に売っていくみたいな、そういうビジネスモデルは正しかったのだなと、今回のオリンピックを見てよく分かった。そのときに、ポールマッカートニーみたいなものではなく、ファンクは70年代だから最先端とも言えないが、新しいものがでてきたときに、目配せくらいは、札幌位の大きな都市では紹介くらいはすべきだと思っている。だから、オペラもしなければいけないし、PMFもなければいけないのだが、その反面小さなスペースとか、小さなプログラムであれば、そういったものも、大きな予算がかかるわけではないので、市が紹介する形はあっても良いと思うし、まさにそのときに、どのくらいの案配なのか、先端なのかというのは人による。運営する人たちの案配だ。年に6つ紹介するときに、最前衛のものを6つやるのかということもある。やる人たちは、高齢者の人たちや、あるいは素人の人たちの反対意見だけではつらいので、やはりいろいろ組み合わせてやる。実施する人の問題があると思う。

アートセンターというのであれば、多少拒否反応があったり、まだ見たことがないものでも、見せることによって、考えてもらうことによって、市民の脳みそを柔らかくする、それが生涯教育としても、社会教育としても非常に重要なことだと思う。そのリスクの取り方はテクニカルな問題だと思う。

【事務局】

アートセンターとはそのようなことをやらなければいけないのだという点で、共感する。さきほど、伊藤副委員長がおっしゃっていたが、これからのアートは、コラボだと思う。例えば、クラシックと邦楽だとか、そういう試みをアートセンターでやってみよう、そういうことが大切だと思う。

【伏島委員長】

この話は、運営の話だ。つまり誰がどのように転がしていくか。いろいろなことが考えられるが、我々としてはこんな運営モデルを提案したいというところまで絞り込んで、提案できるものならば、していきたいと考えている。

これから次代を担っていく人たちに、自分たちの時代のモデルを書きこんでもらいたい。これまでもいろいろな経験がある。水戸芸術館では、亡くなってしまった吉田秀和さん、このモデルは、これはこれで一世を風靡した。兵庫県立芸術文化センターでは新しいモデルを展開している。すごく市民化している。いろいろなモデルがある。なので、札幌はアートセンターと北1西1でどのような札幌モデルを展開するのか。これは、すごく重要な話だし、ここにいるメンバーだけでは決めてはいけませんが、少なくとも誰かが最初の球は打っていかなければならない。

文化芸術振興条例にもあるように、円卓会議は自由なので、ぜひ、伊藤さんや漆さんを中心にみなさんに考えてほしい。

【事務局】

ヨコハマのアーツコミッションでも、今おっしゃったことまではやっていないのではないかと。アーツコミッションの中で、今まで価値が定まっていなようなものを自主企画として市民に見せているかということ、そこまではやっていないのではないかと。それを札幌のアートセンターで行うのは一つの新しい価値だと思う。

【伊藤副委員長】

今、イメージとしては、常勤・非常勤含めてどれくらいのマンパワーの組織を考えているのか。

【事務局】

それは、まだまったくこれからだ。

【伊藤副委員長】

担当者をはりつけないと、ちゃんとしたことはできない。これは本当に、市の覚悟が必要だ。

【事務局】

市の職員だけではなく、ボランティアだとか市民の持っている力をどのように活かせるのかということか。

【伏島委員長】

人事計画をつくることだ。例えば、この部分は芸術文化財団の出向者、この部分は有識者、ここはボランティア、インターンシップというような人事構成案、芸術監督をどうするかとか、そのような具体的な案を検討しないと空論になってしまう。

【伊藤副委員長】

大賛成だが、インターンシップでいうと、必ず大学と連携しろという話になるのだが、大学は簡単には連携できない。つまり、大学との連携という、単位がつくので、札幌市で引き受けるときに、それは単に見習いという意味のインターンシップなのか、単位化されたインターンシップなのか。活動中にいろいろなことが起こるから、そのための保険にどちらが入るのか、それらのことを全部きちんと決めて、インターンシップが成り立つ。それを何となく曖昧にして学生に体験させてやるよというのはまずいので、アートセンターの中にも、人事労務関係の人を置くということまで考えなければならない。

事業を小中学校といっしょに行くと、小学生を半日休ませて美術館へ連れて行くことだけでも大変なので、そういうことを含めて、主体・音頭取りになるアートセンターの中に、しっかりとした人をつけるということが重要な気がする。そうでなければ、絵に描いた餅になってしまうかもしれない。

【漆委員】

どこまで、アートセンターの形を具体化するのか。

【伏島委員長】

それは、我々の力と時間しだいだ。100%かっちりしたものは必要ない。思わず、人事構成のことを言ってしまったが、そういうことを課題として明示するだけでも意義があると思う。まずは、人事について厳しい状況の中で、市民のマンパワーとか、いろいろな働く機会ということもあるが、自分の能力・経験を発揮できる場所をつくるということは非常に意味がある。そのようなことも含めた人事構成のありかたを提示して、深く検討する必要があると思うだけでも意味があると思う。

【事務局】

価値の定まっていないものもやるというような、アートセンターの中で何

をやるのかという提案も意義があると思う。

【伏島委員長】

それは、都市の経営戦略とも大いに関係することだ。市民のニーズだけ満足させればよいと考えるのか、世界に冠たる都市になるのだと。

【漆委員】

アートと言ってしまった時点で、難しいなと個人的には思う。もちろん、全否定しているという意味ではなく、アートセンターが出来たことに札幌市民全体が意義を感じてもらえるかということを見ると、最初から圧倒的に支持されるものにしようということ自体が、アートセンターという言葉を使った時点で難しいのではないかと僕は思っている。もし仮に市民感覚が、アートセンターを理由付けする上ではずせないとするならば、コミュニティセンターと言ってしまうと、その中にアートの、このような要素もあるというようにした方が、一般の人は分かりやすいし、受け入れやすいと思う。でも、アートセンターなのだと言うのであれば、アート本来の面白さとか、なんでアートでなければいけないのか、アートにしかない可能性みたいなものが盛り込まれていることが、実験的なものとか先進的なものと言う議論につながっていく。

最初から市民全体に対して平等に良いものを提供すると考えすぎてしまうと、他と変わらないものになってしまう危惧がある。

だからといって、限定されたアート好きのためにつくるわけではないのだが、なぜアートが分けのわからないものだったり、受け入れられないものであることが多いのか。結局そうしたものでしかなかったりするのか。そのようなことをアートセンターのことを考えて行く上で、もう一度再認識している。

もし、アートセンターを自分なりの解釈でやっていくとしたら、今までなかったことをどんどんやっていけるインフラが整っている所というような感じがいいなと思っている。この伏島委員長の骨子案ですごく良いなと思ったのは、ホテルとかの滞在型施設だ。アーティスト・イン・レジデンスとか数週間アーティストを滞在させていることも多いが、そうした環境があるとよい。また、スタジオ的な環境が組み込まれるのが良い。

【伏島委員長】

今の時点で、アートセンターなるものに対して懸念を持つようなことではまずいと思う。懸念を持つのではなく、より楽しいもの、より分かる

もの、積極的な明るい方向でつくっていく時間があると思う。すでにあるものを批判するのではなく、今まさに創造しようとしているわけで、それをおじいちゃん、おばあちゃん、こどもを含めて、アートに長けていない人も含めて、柔らかく、楽しくプレゼンテーションしていくアートセンターを提案していけばよいと思う。

【本家委員】

さきほどのアートソムリエの話にもどるが、「私はこういうものが好きなのだが、ほかにどのようなものがありますか」と聞きに来る人は、ある程度知識がある人だと思う。しかし、ある程度知識がある人は逆に聞かないで、自分で調べると思う。

だから、聞きに来る人は本当に何も分からないで来る人だと思うので、そんなにアートソムリエに専門的な知識は必要ないのかなと思う。それなら、学芸員さんにお任せすれば良いのかなとも思う。「私も見たのだが、これおもしろかったよ。」と言うくらいの感覚で勧められる方が、さきほどおっしゃったように、親近感というか、相談のしやすさがあるのかなと思う。ちょっと学芸員さんだと、美術館のシーンとした中で質問するのは勇気がいる。

近所のおばちゃん感覚で聞ける人の方が、聞けるのかなと思う。

最先端のものを置くということに関してなのだが、漆さんに連れて行ってもらって、CAI現代美術研究所へ行ったことがある。そこで、壁に人形がくっついていたので見て、ちょっとびっくりした。例えば、それを、500m美術館のように見たくない人も見てしまう環境に置くのはどうかと言う気もする。

金沢 21 世紀美術館のように、無料ゾーンと有料ゾーンがあれば、見たくない人は見なくてもいいし、実験中のような部屋を作って、入ってしまったみなければ良かったと思われれないように、レストランのショーケースのように、ある程度のあらすじのようなものが置いてあったりするとよいと思う。ただ、100人が100人良いと思う絵や映像はないと思うので、逆の意味で、びっくりする体験を試してみるのも良いのかもしれない。それでやっぱり私はこのようなものが好きなのだとは再認識してもらえるかもしれない。

【伏島委員長】

要するに予告編にはニーズがあるようだ。

【漆委員】

もちろん、何か展示をやるとなったら、展覧会を企画する専門家がアート

センターの中において、最低限場所によっては匂いがしてはいけないものとか、きちんと精査した上でやるので、露骨に市民に不快感を与えるようなものは出しにくいと思う。いずれにしても、評価が定まっても、好きな人も嫌いな人もいるので、それは古いものだろうが新しいものだろうが、そのときにやらなければならない、やった方がよいものがある。その辺を、アートセンターは特に枠がなく、ちゃんと取捨選択できるような状況にあれば良いなと思う。

【伊藤副委員長】

500m美術館には見たいものもあるし、見たくないものもあるだろうが、それに関して言うと、若手の人のものを展示しているので、力及ばずというか、もっとお金があれば、もうちょっとできるだろうというものも、当然混じると思う。ただ、一つ重要なところは、道外から札幌に来た美術作家の人が、札幌の現代美術を見たいと思った時に、ある程度常設でやっているところは、市内だと500m美術館になってしまう。ほかは、モエシに連れて行くしかないという話になる。そういう意味では、ある種の拒否反応やスリリングな部分があっても、現状を見せるということは必要かなと思う。

【野田委員】

アートセンターで出す芸術、アート作品を考えた時に、札幌で美術館が一つもないのならオーソドックスなものをどんどん展示したらよいが、既にあるので、市民の人が観れる芸術作品の幅を増やすというか、振り幅という意味で機能して欲しいなと見る側としては思う。

私自身も現代アートと呼ばれるものに興味がある。評価が定まっていないものも積極的に取り上げて欲しい。

これは質問だが、アートソムリエという言葉が何度もでてきたが、これは、アートソムリエと言う名のボランティアの方のことを言うのか。

【事務局】

そういうことで、芸術文化にすごい知識を持っている方がいて、その力を市民の方に提供するということだ。

【伊藤副委員長】

さきほど、美術館で誰に聞いたらよいのかというお話しがあったが、美術館には展示室に監視員がいる。その人たちを、給料を支払って職員としている美術館もあるが、新しい美術館の場合は、比較的、ボランティアで行って

る美術館も多い。市民の方だったり、学生さんだったり、当然研修を受けて行くのだが、美術や芸術が好きで来ている人達なので、聞きやすいということもある。プロフェッショナルの警備の人は、美術に詳しいとは限らない。それはいろいろなやり方があると思う。

例えば、福岡など歴史が長いので、監視のボランティアの方が高齢の方が多いのだが、話したくてしかたがないようで、絵の前に立ち止まると、監視員の人が「どこがよいと思いますか」と話しかけてくるという例もある。アートソムリエ的な市民との文化的な語らいには、おそらくそういうものも含まれている気もする。

【伏島委員長】

さきほど、本家さんがおっしゃったように、学芸員さんになら聞きづらいという感覚は普通にあると思う。

一方で、伊藤副委員長がおっしゃったように、私の経験でも、佐賀県立博物館に入ると、まさにアートソムリエ的なおじさん、おばさんが待ち構えている。いろいろな形があると思うので、アートソムリエは、今生まれつつあるので、みんなで寄ってたかってよいものに作り上げたらよいのではないか。この件に関しては、札幌がトップを走っているみたいに。

ボランティアが有償なのか無償なのか。これだって議論がある。無償のソムリエもいれば、プロなので有償の方もいるかもしれない。みんなで制度設計していけばよいと思う。

アートセンターの制度設計は、まさにみんなでできると思うので、まだ多少時間はあるので、ぜひいろいろな書き込みが欲しい。それをまとめるので。

【漆委員】

さきほど、伏島委員長のメモに書いてあることは、どこでも目指しているものではないかと言ったが、もう一度見てみると、人に重点を置いているということが強みかもしれないという気がしている。その辺を伸ばしていけると、他のアートセンターとの差別化が図られるかもしれない。

人材育成という言葉で片付けてしまうよりも、人と人との関係性をつくっていくとか。

【事務局】

アートサロンをアートセンターの中につくることになると思うが、アーティストと市民との交流とか、アーティストでも音楽家と美術家とか、パフォーマーの方々との交流とか、アーティストと産業界との交流だとか、そのよ

うなことができる場をアートセンターの中につくらなければならないと思っている。

ただ、それは場所があればできるものではなく、何かのしかけがないとできないと思う。そのしかけは、どのようなものを作ったらよいのだろうか。

【伊藤副委員長】

インフラ的なことで、美術に関して言うと、10年20年前のやり方と言うと、公開型のアトリエをつくっている。アーティスト・イン・レジデンスといったときに、作家がそこで滞在型のアート制作をするのだが、小さなアトリエだが、そこもガラス張りにしてしまう。そこで、毎日アーティストがものを作っている。一日インターネットをにらんでいることもある。にわかにもものを作り始めることもある。

毎日毎日それを見に来ていたうちに、3カ月たって、だんだん作品が出来てくる過程を見ることが、市民の方にとって糸口にもなる。最近、ワークショップ型の美術が増えているのは、美術の側からの要請や、地域の方からの要請もあるのだが、既に出来た絵とか出来た彫刻や、作家その人がどのような人かというようなストーリーに、見る人たちも、もう余り興味がなくなっているからだと思う。それよりも、どのようにするのか、どのように考えているのかを見た方が早い。公演の本番はもちろんあるのだが、その練習を見るということもある。

欧米の美術館では、アーティストの卵たちと一緒に食事をするというのが多い。

アメリカでは、マイノリティーのアーティストの卵たちが、飯を食えと年に数回、市や美術館にお金をいっぱい入れている弁護士などに素敵なレストランに連れて行かれることがある。彼らは、普段は株などの話しかしないのだが、年に数回、ベトナムから来たとか、日本から来ているらしいなどという美術作家の卵と、忙しい時間を割いて、食事をしながらしゃべる。そうすることによって、彼らは贖罪をしている。そのような美術作家の卵たちが言っているようなことは、彼らはほとんど分からないのだが、彼らにとってみると、貧しい画学生と飯を食ったとか。この人たちをサポートするためには、美術館にお金を入れなくてはということに意味があり、それが大きい。だから、美術作家やミュージシャンの卵たちにとっては迷惑なことかもしれないが、サロンにはそのような開き方もあると思う。

あとは、小さなレセプションとか、市内のセレモニーはアートセンターの統一スペースで行うとか、記者会見も常にそこでやるとか。最近改装している宮の森美術館も、東京の、古くからある原美術館でも、結婚式場として使

わせている。パーティーの会場として中庭を使わせることで会員を増やしている。そのような露出の仕方というか、美術や芸術以外のことに使ってもら、そこで行う人が文化的な人なのだという仕掛けがあるのではないか。

【伏島委員長】

ずっと課題としてあるのだが、敷居の高さが言われている。芸術の森でさえ敷居が高いと言う市民がいる。キタラはもっと敷居が高い。オペラという文字を見ただけで拒否するというような。自分にはとても入って行けないという日本的な拒否反応がある。そういった意味ではサロンの意味があると思う。

メセナもそうだ。企業メセナがなぜふるわないのか、これは税制の問題だけではない。仕掛けが足りないから、分からないから、と言う意味では、このサロンはかなり重要な機能をもたらすと思う。これは、まさに都心だからできると思うので、ぜひみなさんにもこれからアイデアを出していただきたい。

【漆委員】

いろいろ実験的なことができそうなところ。

【伏島委員長】

これなんか、書き込んで良いと思う。そこまでやるかというくらい書き込んでちょうど良いと思う。

【漆委員】

でも、一般の市民の人たちは、アーティストとお話ししてみたいと思うのだろうか。

【伏島委員長】

思うけど、間に誰かがいないと、話せないということがある。

【本家委員】

1人ではちょっと行けないと思う。私も、今回円卓会議に参加させていただいて、オペラもこんなに安いのだなと思ったし、オペラの方は普段どのような練習をしているのだろう、斎藤さんの演劇にしても、普段どのような練習をしているのだろうか、裏方の方が気になる。本公演は、お金を払えば行けるのだが、裏方的なことの方が市民は知りたいというか、このような努

力をしているんだとか、裏方を知ったからこそ本公演にも行く価値があると思うこともあるのではないか。

【田中委員】

今までの議論の総まとめとしては、委員長の骨子案が、そのとおりだと思う。

アートセンターの内容が問題だ。それこそ、事業の裏方を知りたいと言う人もいれば、実際に自分も参加したいと思う人もいるだろう。

そのような意味で、多岐にわたっての、多彩な参加プログラムが必要だと思う。だから、日替わりとは言わないまでも、週替わりとか月替わりで、この参加プログラムを発表していくというのも一つのアイデアかなと思う。

何をというのは、ちょっと分からないのだが、それと同時に運営するにあたっては、素人の方から専門的な人まで、これもまた多彩にそろえないと、市民それぞれの意見をくみ取れないと思う。片落ちになってしまうと、市民から不満もでるだろうし、だからと言って、公平にみんな同じにということも難しいところなので、一市民からアカデミックな先生までの意見も吸い上げる必要があると思う。内容はこれから吟味して、みんなを出して行って、選択していけば良い。

【伏島委員長】

というようなことを楽しく会話できるサロンをこれから始めるとか、アートセンターの入口として。円卓会議は、委員しか参加できないから。

【漆委員】

みんなの欲しいものが多様化してきたために、既存の施設では補えないものがどんどんできてしまって、はみ出るものがある。要は取りこぼされているものがたくさんあって。例えばオペラという確立されたジャンルがあるかもしれないが、その中でも多様化しているということだろう。

【井出委員】

その通り。

【漆委員】

そういうものも含めて、アートセンターの中でいろいろなかたちで体験できたり、参加出来たり、垣間見ることができるよう。物理的にガラス張りになっていなかったとしても、その裏側とかプロセスを普通だったら出来あが

ったものしか見られないのだが、そこを体感できたりとか、それ自体が作品のプロジェクトになっているというようなものが含まれているというような。

【田中委員】

選べるということが、必要かなと思う。自分の好みのものが選べたり、自分のレベルに合わせて選べるものがあったら良いと思う。ここはちょっと参加できないが、ここならできるとか。

【井出委員】

委員長がまとめてくださったことは、すべて納得することが多い。今回の6回まででこれだけのことをまとめてくださったのは素晴らしいことだと思う。

アートインターンシップの事業についても、インターンシップを行うにはいろいろ問題があるとことを踏まえたうえで、「さっぽろオペラ祭」では、北海道教育大学のアートコースの学生さんにお手伝いいただいている。お手元のチラシのデザインも教育大美術科の学生を対象にコンペを開催し選ばせて頂き作成した。また、運営の方でもいろいろ関わっていただいている。

いろいろアプローチする方法を公開して欲しいということだった、オペラを普及したいとさまざまな企画(アウトリーチ・公開レッスン・公開オペラ講座)を行っている。

オペラ祭としては仕掛け、宣伝が今一つなのか、認知度が今一つなのかもしれない。

オペラスタジオの「ヘンゼルとグレーテル」の際には、学生対象で、ワンコインオペラ(500円でゲネプロ)を公開して、見ていただくことも行っている。

しかし宣伝方法、告知方法を、いろいろこれから試行錯誤しながら普及活動(アートマネジメント)が大切であると思う。

【事務局】

ゲネプロといっても、一般の人はその言葉の意味が分からないだろう。本公演なら1万円だが、ゲネプロなら500円で観れて、すごく得だというようなことが分からないだろうから、そのようなことがもっと市民に広まらなと、ということもあるだろう。

【伏島委員長】

歌舞伎座の立ち見席なら、みんな知っている。オペラのゲネプロは歌舞伎

座の立ち見席ほどには分からないかもしれない。

【井出委員】

そこら辺りの仕掛けの面で、まだ、いろいろやらなくてはならないこともたくさんあるだろう。

【伏島委員長】

各分野で宿題はあるだろう。そんなこともアートセンターで情報交換して。

【井出委員】

美術の方、また演劇の方、写真の方、オペラ・バレーの人、色々なジャンル方達が、アートサロンというものを介して、話し合っただけでコラボレーションしていける環境であって欲しい。

【事務局】

いろいろな分野の方は案外横には付き合っていない。

【伏島委員長】

あえて、仕掛けて良いと思う。アートセンターをつくるためのサロンを始めると言えば、みんな気になるから。

今日は、傍聴の方にも御意見をうかがいたい。

【傍聴者】

フリーランスのアートプロデューサーをしていて、アーティスト・イン・レジデンスが専門。札幌国際芸術祭の事務局のお手伝いもさせていただいている。

市民を主役にする芸術祭を目指している中で、今日のお話は非常に参考になった。アートセンターで目指そうとしている理念の具体的な形が、芸術祭というイベントの中で実験できれば良いのかなと、ちょっと妄想した。その中で、田中さんがおっしゃったことに非常に共感した。選ぶということ。市民が主体性を持って選ぶことのできる環境づくりというか、設定を芸術祭というイベントの中でも行っていきたいと感じている。

【傍聴者】

オペラ、音楽関係のプロデューサーを行っている。今日はじめて参加させていただいて、アートセンターとかアーツカウンシルについてのお話だったの

で、非常に興味深く聞かせていただいた。

アーツカウンシルのことは非常に重要だと思っている。ある自治体の文化政策が首長の想いで簡単に変わってしまうことには危機感を感じている。

本来、アーツカウンシルは政治から文化を守るためにある。札幌においても、アーツカウンシルができて、市長の意向に関わらず、市民が求めるものをちゃんと大切に継承するしくみをつくるのを急がなければならないと思う。

アートセンターは、昔からいろいろ耳にしてきたがよく分からなかった。アーツカウンシルが市民のための文化政策を継承してちゃんとやっていく。その想いを市民に行き渡らせるために、アートセンターがあるのではないか。

アーツカウンシルという文化行政機関があり、それと市民をつなぐためにアートセンターがある。そこでは最先端のものもあれば、教育普及事業もあるという位置づけになると良いのかなと思う。

【伏島委員長】

委員のみなさんは、1行でも2行でも、私へ直接でも事務局でもよいので、ぜひ個人的メモを自由に送ってほしい。それを私と副委員長、事務局でまとめて、次回に御計りしたい。